

チーム農援隊と蕎麦への関わり

江戸ソバリエ 12 期 高橋 正

令和 3 年新型コロナの第 4 次感染状態で緊急事態宣言真っ只中、しかも 8 月の酷暑、家内に行ってくるよと出かける先は、チーム農援隊の例会があるさいたま市西区にある研農場。(実活動の農場を研農場と呼んでいる。)

《チーム農援隊とは》

このチーム農援隊は今から 15 年前の平成 18 年(2006 年)10 月に発足した農業支援活動グループで、都市化の進展、農業の担い手の高齢化、労働力不足、後継者難等に直面している農家を少しでも支援するために、さいたま市が立ち上げた第 1 回援農ボランティア講座を受講した数人が、自主的に立ち上げたグループで現在に至っている。

名前はあの海援隊を頭に於いてその理念を

- ・個人ではなく、チームでの活動
- ・できる人が できるときに できることをやろう

としチーム農援隊と名付けた。

そして次のような高邁な活動目的を掲げてスタートした。

《活動目的》

- ①農家の繁忙期の労働支援を無償で行おう。
- ②独自の研農場を持ち、会員全体の農業技術を磨いて行こう。・
- ③農業をベースに積極的に多方面への社会参画をするグループになろう。

15 年を経て活動内容は少しずつ変化をしながらも、物づくりによる収穫の喜び、楽しさ抜群の仲間同士の懇親等で参加率の高い活動を続けている。

会員は 15 名、例会は月 4~5 回、栽培は野菜、根菜、芋類、豆類、蕎麦等の約 20 種程度
現在運営はリーダーを設けず、数名の運営委員による合議制を取っており、年間計画・予算を立て、例会ごとに資料を作成して当日やるべき内容を解りやすくしている。(私も運営委員の一人)

尚、平成 34 年には内閣府から「積極的な社会参加活動を通じ生き生きと充実した社会生活を送っており、社会参加活動の見本である」との事で表彰状と盾が贈られた。



さて蕎麦への関わりであるが、

《蕎麦への関わり》

- ①研農場における物づくり活動として、蕎麦の栽培活動を行っている。
発足当初から蕎麦への挑戦意識は高く、数年後には蕎麦担当とグループを設けて積極的に蕎麦栽培に取り組んできた。



収穫した蕎麦は製粉後、内部の蕎麦打ち活動や収穫祭に使用する他に、外部社会活動の手段として利用している。 (写真は収穫祭風景)



- ②収穫した蕎麦粉を活用し社会参画活動の輪を広げている。
(日本の食文化を伝える各種教室、イベント等)

○近隣直販店における実演蕎麦打ち販売活動



○さいたま市の小学校(数校)のチャレンジスクールとして蕎麦打ち教室の支援



○東日本地震の被災地(宮城県亘理町、福島県いわき市)への支援活動

・被災地へそれぞれ数回訪れ、蕎麦交流会、演芸交流会で蕎麦を打って振る舞った。



・亘理町の要請からトマトの収穫応援や、いわき市のコットンプロジェクトからの要請で研農場に於いてオーガニックコットンを栽培し、収穫品の無償提供等を行った。



この写真は被災後数回訪れた亘理町の蕎麦打ち仲間の家で蕎麦を打ち合っ後のドローンによる会食・歓談(2018.11)風景である。



《これから》

○コロナ禍の影響もあろうが、どうしても研農場における物づくり活動が主体となりつつあり、農家支援や社会参画活動がおろそかになりつつある。
社会環境が改善されるとともに、是正してゆく必要を感じている。

○発足から 15 年もたつとみんな歳をとる。
平均年齢が 75 歳のグループではどうしても労働力エネルギーの不安が付きまとう。
若い会員の参画に向け推進する必要がある。

○蕎麦栽培に関しては何回か挑戦して成績不振の春蕎麦栽培を含め、手間がかかる蕎麦栽培を続けることが難しくなっており、ここは踏ん張りどころである。

○私も自身のリハビリの一環として、まだ活動が続けることになりそうである。

以上